士は 術館蒐集の「日本畫の價値」に就いて講話せられ、 而して講演を終りたるは、 ペインの話し」を了り、坂井犀水氏は「何を求むるや」といふ題 今の美術家の求むる所を論じ、次に中川忠順氏は「ボストン美 「繪畫に關する偶感」を語られて、 鴉は塒に歸りて暮色靜かに窓を壓する頃 聴衆の感動を惹かれたり。 尋で三宅雪嶺博

なりき

四 川町田端四九八番地へ畫室新築中なりしが、 ○職員諸氏の近況 氏は下谷區上野櫻木町十九番地へ轉居せらる。 郎氏は、 △教授古宇田實氏は十一月三日御實父を喪はれたり△囑託大島勝次 雇助手神矢教親氏も、 雇助手八卷於菟三氏は今回小石川區宮下町三十五番地へ轉ぜらる△ 戸田方へ轉居せらる。 病氣療養のため相州茅ヶ崎に轉地し居らる△囑託矢代幸雄 雇助手鈴木宮吉氏は先頃本郷區駒込動坂町二四 本郷區駒込林町二百二十七番地へ轉居せらる △雇助手篠田十一郎氏は先般來府下瀧野 此程竣成移轉せらる△

東京美術學校近事 二四 一七。 T・五・一・十二

等に陞敍せられ、 ○主任の任命 病氣のため十一月三十日願に依り囑託を解かれたり。 野道也氏はその本官たる印刷局技師に於て、十二月十三日高等官三 ○昇敍と解囑 教授安田錄造氏は十二月九日高等官六等に、 十二月六日海野 又本校修身及教育學の囑託たりし乙竹岩造氏は、 〔美盛〕教授は、 金工科主任を命ぜ 囑託矢

○助教授の出張 助教授松岡輝夫氏は、 京都へ出張を命ぜられ、

週間の見込を以て十二月十一日出發せられたり。

関 連 事 項

1 臨時写真科設置

大正四年二月二十日、

臨時写真科が設置された

641

642

覧従大正四年 648 頁記

事参照)。同科の学科課程と授業要旨は『東京美術学校 に次のように記されている。

「学科課程表」

美	繪	圖	材	製	寫	光	色	化	化	物	數	修	雷	果
	畫及圖	案	料及藥	版術大	眞	化	彩	學實		理				
學	案	法	品	意	術	學	學	驗	學	學	學	身		
														1
	四				=		_	Ξ	=	_	=	_	第一學年	每週
=	四	=	=	=	=	_			=			_	第二學年	教授時
					=	_			=			_	第三學年	數

	體	外	實	遠	解	
ė.		國		近	剖	
計	操	語	習	法	學	
1.1						
		英語		\$ x		
	=	$\stackrel{-}{\rightharpoonup}$	六	$\vec{=}$	$\vec{=}$	
		英語				
	=	$\vec{=}$	八			
		英語				
	=	$\stackrel{-}{\Rightarrow}$	\equiv			

〔授業要旨〕

ノトス 諸種ノ範式ヲ教授シ爾餘ノ期間ハ主トシテ實技ノ習熟ニ充ツルモ 年級ヨリ第 本科ハ寫眞ニ關スル 一年級 ノ半ニ到ルノ期間ニ於テ學科ノ大部分及實技 理論及實地ヲ教授ス 其ノ授業ノ方針 第

卽チ第 普通化學、 色彩學、 一年ニ課スル學科ハ共通學科ノ外、 材料及藥品學、 寫眞術、 解剖學、 寫眞術、 遠近法、化學實驗トシ第一 光化學、 數學、 製版術大意ヲ課シ第 物理學、 一年ニハ 普通化

三年ニハ寫眞術及光化學ヲ課ス

法 實技 ライチング、 題トシテ各種ノ採光法例へバ、プレインライチング、 部 其他ノ豫備的實習 ハ最初寫眞機械各部ノ名稱、 ヲ ハ繪畫及寫眞實習ノニトシ寫眞實習ハ之レヲ三部ニ分チ、 、陰畫部、 進ミテ教授シ第一 ラインライチング、 第 一部ヲ修整部、 ヨリ始メ顔面、 一部ニ於テハ修整術 取扱方等ヨリ順次肖像寫眞ヲ主 第三部ヲ陽畫部トシ、 ホーリ 衣服、 ンガーライチング等易ヨ ノ説明、 背景、 用具 風景畫等ノ修 レンブラン 第一 使 部 用 第

0

2

鐵印畫、 現像紙 法 ハ第 整並ニ陰板裏面ヨリノ修 (例 一年ニ於テ銀印畫中ノ燒付紙 ノ諸法ヲ教授シ第二年ニアリテハ主トシテクロム酸鹽印 (例へバ、 カーボン法、 ブロマイト紙、 整、 オイル法) 陽畫ノ修整ニ及ビ更ニ第三 瓦斯ライト紙) (例へバ鹽化銀膠紙) ヲ授 其他白金印 部 IJ ニ於テ 漸次 書

以上ノ デ之レヲ修得セシメ殘餘ノ一學期及第三年一、 〔術ヲ應用シ課題ニ據リテ新作ヲナサシメ最後ノ一學期 如クニシテ普通寫眞術全般ノ實技教授 ハ第一 二ノ兩學期間 一年第一 八旣 ハ専 期

ラ卒業製作ニ從事セシム

時間 課スル學科 リ即チ科學的寫眞 又學科ト稱スルモノノ中ニモ時トシテハ實驗ヲナサ 並ニ應用寫眞 ノ一部ヲ割キテ多少ノ實習ヲナサシムルガ如シ ノ細目ハ甚ダ複雑ナルヲ以テ玆ニハ之ヲ略 (例へバ顯微鏡寫眞、 (例へバ陶器寫真、 漆器寫眞等) 天體寫眞、 X ノ如キハ講義 シムル 又此ノ科 光 線 コ 寫 トア 眞

述べている。 年。 科の主任教官であった鎌田弥寿治は されたことは我が国の写真教育史の上で画期的なことであって、 教員、 後に千葉大学写真工学科へと発展した。東京美術学校に同科が設置 講座 たのは明治四十一年東京帝国大学応用化学科で「応用光線化学」 臨時写真科は大正十二年に写真科と改称。 東京写真大学短期大学部出版部)の中でそのいきさつを詳しく 設備は東京高等工芸学校の印刷工芸科に移され、 (鴨居武担当) それによると、 を設けたときで、 我が国で写真に関する高等教育が始ま 『日本写真教育史』 その後、 同十五年に廃止され、 九州帝国大学 第二次大戦 (昭和五十 同

写真化学の講義が行われたが、官立学校の中で写真科が設置され おりから高まってきた写真科設置運動を促進することとなったので の残した設備を土台にして本格的に写真化学の研究を始め、 帝国大学へ転任し、 を担当する傍ら写真化学の設備を整えた。同四十三年、大築が京都 照)。

大築は明治三十八年に東京美術学校教授となり、

工芸化学授業 正木直彦であるから、 のは大築千里であった(既述のように大築をバックアップしたのは のは東京美術学校の臨時写真科が最初であり、設置の端緒を作った 沢良夫)、明治専門学校 鎌田はこれを次のように述べている。 鎌田弥寿治が後任に起用されたが、 ここは大築および正木と言うべきか。 (寺野寛治)、京都帝国大学(大築千里) 鎌田は大築 また、 317頁参 等で

の外に、写真に関することや写真製版に関する施設が、同じ工芸塗料実験のような美校必需の施設はもちろん備わって居るが、そ上ったばかりの大工芸化学教室があり、その内部は、金属分析や然るに、いよいよ美校に来てみれば、大築さんが設計して出来

化学教室内に完備して居 東 何分にも、同教室は全 年 部で二十七室から成り、 手 部で二十七室から成り、 手 数約三百二十坪もあ り、その約三分の二は本 尊の工芸化学施設ではな

研究や、実演に適当とするものであった。

性格の異なったものであることを、徐々に悟るようになった。見て、先づ写真とは、過去に自分が考えて居ったものとは非常にの写真および写真製版に関する器具機材、その他のものを初めてこの施設のある美校の新教室に転任して来た筆者鎌田は、色々

入にたよって居たのである。 が日本ではほとんど皆、 メラのような器械類の製造工業等の方面のことであり、 趣味を持たず、写真術を行なうために必要な機械や材料の製造工 るであろうが、大築さんの目的は全然それと逆で、写真美術には するにつれて、写真術は人間生活と大関係を持ち、 てきたのである。 でも恐らく芸術写真、すなわち美術写真のことであろうと想像す は写真術を専攻しようという気持が濃厚になってきたのである。 上に偉大なる役目を担うものであることを覚え、それから私鎌田 美術学校で大築千里先生が写真を研究せむとした、といえば誰 写真は行楽の具のみではない。特に将来、 すなわち乾板や印画紙のような感光材料、 これらの写真機械材料類は欧州からの輸 以上のことが筆者にも徐々にわかっ 社会が科学的に進歩 またレンズやキャ 人類の福祉向

を研究してみたいと腹を決めたのである。 と筆者も感付くように、日一日と拡大膨脹することであろう、と筆者も感付くようにに、日一日と拡大膨脹することであろう、と筆者も感付くように

〔中略〕

次に当時の状況、その大体を述べてみたい。前述のように、美

利用されるようになってきたのである。
る美校工芸化学教室が日本の写真者大会や写真講演会などに大にら、日本の写真界にボッポッ知られるようになり、筆者の管理す校内に写真研究等の施設が大に備っていることが、大正二年頃か

但し、当時はまだアマチューア写真家などは極めて少なく、講演但し、当時はまだアマチューア写真家などは極めて少なく、講演但し、当時はまだアマチューア写真家などは極めて少なく、講演但し、当時はまだアマチューア写真家などは極めて少なく、講演但し、当時はまだアマチューア写真家などは極めて少なく、講演の積りであるなどとお答えしたものである。

生の要求は通らなかった。

ての後、小川さんの希望が全日本写真師の希望にふくらみ、同 たの後、小川さんの希望が全日本写真師の希望にふくらみ、同 たの後、小川さんの希望が全日本写真師の希望にふくらみ、同 たの後、小川さんの希望が全日本写真師の希望にふくらみ、同 たの後、小川さんの希望が全日本写真師の希望にふくらみ、同 たの後、小川さんの希望が全日本写真師の希望にふくらみ、同

いと心中で念じて居った。実は私も、これらの人々の要望が容れられて新科ができれば好

あるが、実に温厚篤実の君子で、美術学校の校長を三十五年間勤正木直彦という美校の校長さんは、東京帝大の法科の御出身で

続された人である。

経費を文部省から貰わねばならぬ。はならぬ、文部省の許可が要るのは勿論、新科を維持するための以上のような写真科新設の要求があっても、校長だけの自由に

今一つは、その科に要する経費がないという理由で、仲々正木先育を要するものか、否か、を御存知なかったようにみえるのと、したが、当時の政治家先生達は、写真というものが果して高等教

そこで正木先生は、

度々、文部省に行かれ、この問題を持ちだ

経費がないというのを理由にして、その実現を躊躇した。まで漕ぎつけ、それが大体通過したのである。然るに、文部省は議士数名に依頼し、美校内に写真科新設を議会に提出して貰う所議と数名に依頼し、美校内に写真科新設を議会に提出して貰う所

寄附者でも現われたらそうでもない、と言われた。由で本年(大正三年)からの新設は無理である。だが若し経費の由で本年(大正三年)からの新設は無理である。だが若し経費の理

な、と言われた。
ら、小川さんは、君、そこまで行けば何とかなるよ、心配し賜うら、小川さんは、君、そこまで行けば何とかなるよ、心配し賜う

喜ばれ、かねて新設を要望された多数の営業家達を学校に招き、そこで私はまた、それを正木校長に伝えると正木先生も大いにまったらしいので、再び私にその事を話してくれた。この後のことは筆者は詳しくは知らぬが、とにかく、小川さん

た。 の有志諸君が次の三箇条を承諾してくれれば、 校長と文部当局とが話し合ったことを委細説明し、 から美校内に写真科を新設すると文部当局は言ったと説明し 本年度(大正四年 若し写真師

頼したら、 すなわち、 向
う
三
年
間
無
報
酬
で
勤
務
す
る
こ
と
。 4 文部省から写真家の誰れかに写真科の講義を依

真屋から寄附すること。 写真科の新設に必要な器具機械、 その他材料、 薬品等を写

年金二千円を寄附すること。であった。 八 大正四年度から、 同六年度まで三ヶ年間の経常費として毎

の返事を需めた。その結果、 さんは逸早くこの印刷物を東京在住の多数の写真館に配って、そ 以上の正木先生のお話を印刷して私は小川さんに届けた。 殆んど全部の人が寄附金 を 承 諾 小川

三郎、 周学、 田与之助、 大武丈夫、岡精一、小川影三郎、 小西六右工門、浅沼藤吉、泉谷底一(三越百貨店)長谷川武七、 承諾された人々の名前を掲げてみれば、 木村庄太郎、 秋尾新六、 成田常吉、上野英雄、 竹内昭祐、 長谷川文次郎、 須田愛、 松本鶴吉、 有賀戒、 田中五 湯本定平、 松田三喜雄、 東条平三郎、 松浦清吉、 佐藤秀道、 二郎 工藤孝、 金城商会、 曾根真文、 田中武 松葉源吉、 岡田君太郎、 宮内幸太郎、 大河謙吉、 村松東洋、 宮崎隆次、 内田雅二、山本又吉、 中島精一、 小川一真、 二川篤二郎、 黒田久吉、 加藤三蔵、 前川謙三、 宮内多吉、 森戸次郎、 玉村 太田挺 佐川 吉川 1騎兵 江崎 須

> 橋哲助、 田 常吉、 太塩彦太郎、阿部享正、 平野守信、 松平豊吉、 水谷鍉、 中鉢直網、 篠原穂之吉、 内山豊、 渡辺籠麿、 大橋松之助、 市川雄三。 望月東涯、 桑田商会 大角堯、 柴 高

以上のような訳で、 東京市およびその附近の写真関係者のほと

んど全部の人々であった。

したのである。 で、正木先生はこれを文部省に申出て写真科新設はいよいよ決定 小川一真氏が中心となって、 以上の寄附金のことが決定したの

写真科」としたのである。 数年後「臨時」は取除かれた。 民間からの寄附金が約束通りに履行されなかったら、何時でも写 真科を廃止し得るためであった。 したものとみえ、大正四年二月二十日の官報で新設を発表すると 然るに、妙なことには、 「写真科」とせずに、 写真科の頭へ「臨時」を加えて「臨時 私達は非常に不快を感じたが、若し、 文部省はなおも新設後の経費等を心配 しかし実際はこの心配はなく、

相当の写真設備を所有していたからである。 ば、 金六千円也であった。それは前に言ったように、 また、今から考えれば実に不思議なようなこともあった。 写真科新設のために民間から寄附金を仰いだが、 美校にはすでに その総額は 例え

人は約束しながら実際は約束を履行しなかった。 んどお話にならぬ小額、 各人の出金額はたった二円または三円というのでほと 以上のように寄附金を承諾した人々の数は約七十人で 浅沼藤吉、 なお、 小西六右エ門、 その上にその後、 それと三越百貨店の五 ただ、 以上の内約六十 Ш 659

あったが、

それと、

真

丸木利陽、

外、現存はしていない。〔前掲書〕 真科が新設されたのである。この事実を知っている人 は 筆 者 の者が各々金千円づつ、計五千円を出してくれて、それで美校の写

学校校友会日報』第十二巻第八号)。東京美術学校庶務掛が作 び九州写真師組合も同様の請願書を文部省に提 出 を文部省に対しても行い、 して衆議院に提出し(同年一月二十二日受理)、 明治四十五年一月、 **一**従大正元年 と思われるものが綴込まれており、 の熱心な運動であった。 臨時写真科誕生の原動力となったのは民間の写真師や写真材料 が初代組合長であった。 これは明治四十三年に創設され、 意見書類」には一真が文部省に提出した請願 組合より写真科設置の請願書を丸山豊治郎を通 これに倣って京阪神三市の写真業者お その中心となったのは東京写真 一真は非常に精力的に運動をすす 次のように記されている。 小 Ш 同年二月には同 真 L (同年帝室技芸員任 た(『東京美 成 師 書 1 請 0 写 た 術 願

上申書

候

東京美術學校ニ寫眞科設置請願ニ付其理由并ニ必要ヲ左ニ開陳仕

設置 藩主ニ 西 日 間 唇 至ルマテ未タ漸ク七十三年ニ過キス .鍋島藩士中村嘉助及藤堂藩士堀江鍬次郎ノー シ蘭醫ポンペ 八三九年 請 ヒ両藩主與ニ其請願ヲ容レ肥前国大村ニ舍密試驗所ヲ 「ダゲレオタイプ」 ーヲ聘シテ舍密學ヲ教授セシメ又寫眞術書 寫眞法發明セラレ 本邦ニ在リテハ安政 一名相 議 テ シテ両 \exists IJ

> 及ハサ 過 義ヲナサ ニ至ル迄既ニ ノ年代ニ比較スル キス ル コト殆ント隔世ノ感アリ 而 シ シテ其進歩發達ノ狀態ヲ考フルト 4 五十有餘年ヲ経 是レ本邦ニ於ケル寫眞術ノ 片ハ我レ ノ彼レニ タリ 吾人竊カニ以テ遺憾ト 遲 之ヲ西洋ニ於 ル、フ 起源ニシテ爾来今 ・僅カニ キハ我レ ケル 約二十年 ノ彼 斯術發

明 日

ス。

= =

然リト 殊更ニ之レ 然色寫眞術ノ如キ愈々出テ、益々社會ノ爲メニ貢献ヲ大ニ 明ト應用 上二一日モ 或 紀元ヲ開キ顕微鏡寫眞術ハ醫學ヲ始メトシテ動植物及鑛物學 アリ 近十数年間ニ於ケル寫眞術 熟知セラル 書挿畫ヲ始メトシテ文學美術工業軍事及其他百 シテ尠カラザルベク殊ニ寫眞製版術ノ應用ニ至リテハ學校教科 ニ多大ノ稗益ヲ與ヘ望遠寫眞術ハ天文學必須ノ利器トナ ス = ス ハ幻燈寫眞術或ハ活動寫眞術等ノ如キハ教育上其資スル 於 若シー ル進歩ト發達トハ決シテ緩漫ナリト言フ 斯ク 從ウテ其社會ニ貢献シタル所ノモノ決シテ尠 雖モ之ヲ寫眞術全体ノ上 1 ヲ喋々スルノ必要ナカル可ク賢明ナル當局者ノ夙 欠ク可カラザルモノトナルニ至レ 例ヲ擧ルトキハX光線寫眞術 猶コレニ止 所 如ク寫眞術 ル 可 ノ應用 マラス ノ進歩ハ彼我ヲ通シテ著ルシ ヨリ ト功用ト 或 見ルト ハ電 ノ無限大ナルイハ吾人 送寫眞術 ノ發明ハ醫學上ニー キハ IJ 可 カラズ 僅ニ 般 寫眞術上ノ發 ノ如キ或 ノ學術事業 五. シ 七十 ŀ 殊ニ レリ 丰 ナ ハ天 所 セ モ 新 輓 間 決 +

テ寫眞學校或ハ類似ノ設備ヲナシ以テ寫眞術ノ發展ト寫眞業者故ニ西洋ニ於テハ獨逸佛蘭西英吉利及北米合衆国等ノ各国競ウ

スル 本邦ニ 卒業生ニシテ寫眞術ニ志サ 是ニ於テカ吾人寫眞業者 中 丰 ル 邦 東京高等工 だ誌ヲ シテ 、寫眞業者トシテ立ツ可 養成ト シテ アラス 於テカ坊 於 國寫眞學 ーシモアラスト雖モ是レ実ニ九牛ノ一 片ハ優 ケル 資トナスニ過キス ロナル 頗フル 於ケル寫眞業ノ数 上要求ノ百分ノ一 九 爲ニ / 僅カ テ其 講シテ以テ寫眞術 於ケル寫眞術 発行シ或 寫真技· 即 ヲ モ ニカヲ尽スヿ大ナリ 収容シ で實効ヲ チ普 近來寫眞術 = 慨歎ニ堪ザ 間 空シク志望ヲ変更スルニ 校二學と ノハ多ク 業學校図案科ニ属 一器械的 或 萬ヲ超 士徒弟 ハ講演ヲ 通學ノ素養ダモナキ者ナリ 八寫眞學校或 ・テ相 収 タルモノ等ニシ メン ノ將來亦實 現今二於ケル普通教育ノ素養ダモ ヲ充タスニ 傳習シタル寫眞術ヲ以テ己レ 當 ノ現状真 ルモノアリ ハ現在既ニ三千名ニ餘リ其技士徒弟 開 進歩ト與ニ相当 到底相當ナル技士徒弟ヲ養成スル キ者ナリ コ ハ夙ニ各都市 ノ啓発ニ微力ヲ尽ス所アリト雖 教 ス者年々其数ヲ増スノ傾向アリ 此技士徒弟ナル者 キ或 1 難 導ヲ施ス可 スル寫眞部アル ハ何 (二寒心 三同 翻 ハ展覽會ヲ 足ザ ト雖モ其修學 々寫眞教授所等ノ看板ヲ掲 リテ テ寫眞業者ト 至ル者実ニ尠ナカラズ 殊ニ近來ニ 情 現在三千ヲ以テ數フル寫眞 三値 ルヲ遺 こ同業者團 毛タル 地場が 本 キ寫眞業者殆ン ノ教育ヲ受タル者或 設ケ或 邦ヲ顧 スル 想兹ニ ノミ ル ハ將來ニ於テ本邦 トス 至 モ モ ニ過キスシテ十 ノ有様ヲ考 ナレ 体ヲ作 ノア ノアル リテハ中 ハ技 3 至レバ本邦 ノ口 テ未 ル 士徒弟獎 IJ 且. 僅 近モ事迂 ナキ者 夫レ ij モ 糊 學校 フル 或 ノ無 ノ任 稀 與 力 本 =

仰

カ

サ

ル

可

カラザ

ル

モ

1

設 吾

現 ス ダ IJ 以 ル 象 ル テ地方ノ子弟ヲ迷 = ハ以テ社會 如 曩 や其一 至リタル歴證ト見ルニ足ルベク竊カニ以テ本邦寫眞 ニ某寫眞學校 例 ナリ 趨勢今ヤ既ニ寫眞學校或ハ類似ノ設備ヲ要求 ノ名称ヲ冐シテ当 ハスニ近キ行爲ヲナスモ 吾人之ヲ以テ遺憾ニ 局 \exists 堪ズト 1) ,其徹去ヲ ノ現 ナ ス ル ` 與 = セ ラ = 至

發

展ヲ欣フ所ナリ

養成所ヲ設置セントソ計畫ヲ立テタルヿアリ カ故ニ遂ニ其實行ヲ見スシテ止ムニ 設立費ト経常費トハ微力ナル本組合 社 ノ能 吾人晏如トシテ默スルニ忍ビズ 人窃カニ考フルニ 會ノ趨勢既 ク完ウス可 ニ寫眞學校或ハ類 キ性 此 質 種 ノモノニ非 ノ計畫ハ本邦 確信 似 本組合ニ於テ先ツ技 ノ設 ス 至リタルヲ遺憾 ノ現情ニ在リテハ私 ノ到底負擔ニ堪 備ヲ 要スルニ当局 要求ス 然レトモ多大ナ ル サ = 設 ス ル 至 立私 立 所 徒 弟 IJ

徒 旣 部 要ナル器具略ホ完備シ同校生徒ヲシテ寫眞術ヲ研究セシ 曩二工學博士大築千里氏東京美術學校教授 察ヲ仰 熟知 寫眞 関 弟 = 殆ント ノ入學 1 セラル セ 撮影室及附属各室ヲ有スル建物築造セラレ 建築物ト器 ラレ て新タ 有名無実トイフモ不可 ヲ 許 タリ 、所 一同校 以 具ト ナル 然ルニ テ本邦 可 ノ存在セ ニ寫眞科ヲ シ 大築教授其職ヲ辞シテ以來同校 ニ於ケル 是ニ於テカ吾人ハ東京美術學校 ル 設 モ ナキ状態ニ在 寫眞術発展 ノア 置セラレ ルヲ幸ト ノ八職ニ 不幸 ノ道 ル1当局 - シ切 ナ H. 在 寫眞術 ル ル 開 寫真技 時 者 同 局 校 ノ夙 ル 值 N 内

請

早計 莫大ナル可キコトヲ信シテ疑ハズ 其製作ヲ當該寫眞科ニ托スルヿトナサンニハ当局ノ便益亦実ニ 育上ノ製作品ニシテ寫眞及寫眞製版ノ力ヲ要スルモノヲ擧ケテ 日ニ於テ寫眞術ヲ以テ東京美術學校ノ一科ト爲サンコト決シテ 或部分ノ如 般美術ト寫眞術トハ其合致スル點一ニシテ足ラズ 稗益ヲ與フル所決シテ尠少ニアラサルヘク又文部當局ノ教 ノ擧ニ非サル可キーヲ信ス 、キハ旣ニ美術工藝品トシテ取扱ハル、ニ至リタル今 加之同校内ニ寫眞科設置セラ

寫眞術

テ本邦寫眞術ノ発展ニー大革新ヲ来ス可キヿヲ確信ス 與フルト共ニ不幸ナル寫眞技士徒弟就學ノ道ヲ啓キ両々相俟チ 之ヲ要スルニ東京美術學校ニ寫眞科ノ一 京美術學校ニ寫眞科設置ヲ必要トスル所以ナリ トハ一ハ以テ當局ノ便益ヲ増大シ一ハ以テ同校各分科ニ稗益ヲ 科ヲ新タニ設置 依テ東 ロスル コ

設置被成下度此段奉請願候也 右之通ニ御座候間特別 ノ御詮議ヲ以テ東京美術學校ニ寫眞科御

治四十五年二月五 日

東京寫眞師組合總代

明

文部大臣長谷場純孝殿

小川

眞

筆で記入されている。 「原文は野紙に毛筆で記されており、 「二月五日」の 五. のみ鉛

> 彦馬、 家の増大等により、かつては学識高く高級技術者と看做されていた 半期に夥しい写真師が開業した。 彬やその他の大名、 る方法として写真科の設置を望んだのであった。 たちに高等教育を授け、より進歩した技術と社会的地位を獲得させ て行った。こうした状況を打開するために写真師たちはその後継者 写真師もその社会的地位が著しく下落し、 続ける中で、 政府に報告された写真術は幕末に我が国に渡来し、薩摩藩主島津斉 般庶民にも親しまれるようになった。 フランスの画家ダゲールによって発明され、一八三九年フランス 下岡蓮杖等による研究の時期を経て実用段階に至り、 写真館の乱立や写真師たちの不勉強、 藩士、 あるいは蘭学者、 全国各地に写真館ができ、 しかし、写真業界が盛況 徐々に経営が厳しくなっ 長崎海軍伝習所、 アマチュア写真

中で、 Ш 十月には『東京美術学校校友会月報』で「なにはばら」という人が 本写真会に団体加入するなどして活発な活動を続けた。 部 学術面で貢献しており、 日本写真会では正木直彦校長が副会頭をつとめ、また、大築千里 三十八年以来大築千里が教授の地位にあったうえ、 「美術としての写真」と題して写真も美術の一分野であることを論 記載されるようになった。こうして写真への関心が深まって来た これに対して東京美術学校側の情況を見ると、前述のように明治 (ソーラー俱楽部) ができて撮影会や展覧会を開き、 真や丸木利陽と親しく交流するようになった。 この年からは年報にも「写真及製版科設置ノ件」と題する要請 大正二年十月、 黒田清輝が宮内省調度寮嘱託を命ぜられ、 同三十九年校友会に大築を部長とする写真 同四十年発足 同四十年に日 (『黒田清輝 同四十四

ある。 記』を読むと臨時写真科開設にあたって黒田と小川は種々協議した 様子で

科をわずか十一年足らずで廃止することもなかったであろう。 ないしは東京美術学校が写真科を必要とする理由については触れて 歩を図る必要があることと、 かどうかは不明である。 いない。 ていることとを設置理由に掲げているのみで、 ・彫刻と並ぶ美術の一領域であるとする統一見解が成立していたの このように写真科設置を受け入れる要因はあったが、 写真や写真製版術は現代生活に必須のものとなり、 もしも確固たる統一見解があったならば、折角できた写真 年報の 欧米諸国で写真の高等教育機関を設け 「写真及製版科新設ノ件」 美術と写真との関係 一層技術准 写真を絵 を見 画

用された。 時写真科の教室としては工芸化学教室の一部とこの特設写場とが使 会会場に設けた特設館写場と写真機材、 臨時写真科設置にあたって写真師たちは講師四名と写真機材、 (毎年二千円三年間)を提供した。写真機具商浅沼商会は大正博覧 教師および担当科目はおよそ次のとおりであった。 図書等を寄附している。 経 臨

写真科主任教授

鎌田弥寿治

光化学、 写真術第三部 材料及薬品

製版術大意

教授 嘱託 矢野 伊東

道也 亮次 林蔵

教授

結城

同

写真術第一部

色彩学

数学

物理、 写真術第二部 化学

> 可 可 笠原 芳太郎 留七

同

加藤

精

ズ

ムの写真家として大活躍した中山岩太は第一回入学生であった。

英語

助手

亀之輔

教授

岡田 森田

秋嶺

絵画 及び

顔面 解剖学

修整実習

画法実習

写真一般実習

撮影実習

図案

教授 嘱託 岡田 沢村専太郎

一郎助

助手 江崎 末弘 直 士: 清

同 同 前川 宮内幸太郎 謙三

、担当は前出鎌田弥寿治著 『日本写真教育史』による。)

師たちが提供した講師で大正四年四月採用。 となった。 して採用されたが、外は製版科その他諸科の教師が兼任するかたち 附金から支払われた。 任した外は大正九年六月まで勤務している。 このうち加藤精一、 末弘直士は江崎清の弟子で正式に本校助手と 宮内幸太郎、 江崎清、 給与は写真師たちの寄 前川が翌五年十二月辞 前川謙三の四名は写真

の異和感もなく勉学に勤しみ、 明治大正文化研究会)を読んでも臨時写真科の生徒たちが特に他科と 大正八年の入学だが、その著 分がなごやかであった」(前出『日本写真教育史』)という。 の子弟が多かった。彼らは 動を体験し、 た様子が窺われる。 生徒は入学志願者三二名 帰国後芦屋 カメラクラブを 作り 長くアメリカ、 「旧来の美校の伝統に同化し、 (受験有資格者) 『明治の写真師』 美術の空気を吸い込んで卒業して行 フランスに滞在して前衛芸術 中一三名が合格。 (昭和六十三年。 (昭和五年)モダ 堺時 極めて気 写真師 雄 は 第15節 大正 4 年 663

ナルな写真家が誕生する基盤ができて行った。従来の写真師やアマチュア写真家とは一線を画するプロフェッショ臨時写真科に次いで大正十二年には小西写真専門学校も設立され、

② サンフランシスコ万国博覧会

景『奈良、港』弐)については、 明治四十四年 博覧会 フォルニヤ大学へ寄贈された。この博覧会に際し、 込額面弐個」は林威三、 と中野営三の「春の岬」が出品されたことがわかる。 太田義一らの作品であり、 術学校近事」の記事(短頁)と重複する部分が多い。 によれば、 ランシスコで万国博覧会が開催された。 して大正四年一月十六日より翌五年一月二十五日の間渡米した。 恒也、 額面弐個」および「鋳造青銅鳳文香炉」、「鋳造渦紋花瓶」はカリ たのを変更して風景画とし、 また、 九一五年(大正四年)の二月二十日から十二月四日までサンフ 松崎孝忠、 博覧会終了後 出品物のうち「日本画成績貼込額面弐個」は望月尚、 博覧会協会サンフランシスコ万国博覧会出品部 出品書類庶務掛」に記録があるが、 山崎善次郎、 藤岡茂男、浅野廉、 「日本画成績貼込額面弐個」、 「西洋画成績額面四個」(自画肖像弐、風 実際には山脇信徳の「停車場の朝. はじめ裸体画三点を出品する予定だ 佐藤直己、 本校の出品については 小倉淳らの作であ 植松俊郎、 久米桂一郎は本 既出 ただし、 「図案成績貼 「図案成績貼 田上尚之、 「東京美 前者 井

川合玉堂起用

大正四年五月十九日、川合玉堂が教授に任命された。玉堂は本名

で、その近代的なものの見方と平明温雅の画趣、安定した技術が一たれらは日本の四季おりおりの自然の美を描き表わそうとしたものだ。四十年文展開設以来審査委員をつとめ、文展に出品を続けた。なり、では、一般のでは といい、明治六年愛知県葉栗郡外割田村生まれ。はじめ京を芳三郎といい、明治六年愛知県葉栗郡外割田村生まれ。はじめ京

般の支持を得ていた。

て候。

○「では、天才は餘りに自己の適所を選び過るものにらしめんとするには、天才は餘りに自己の適所を選び過るものに板に名をのみ求めんとするならば兎も角、眞に子弟敎育の任に當板に名をのみ求めんとするならば兎も角、眞に子弟敎育の任に當

△それよりは能才、俊才を擧ぐるの優れるを信ずるものにて候。

する所なきを信ずる者にて候。 ○玉堂は冷靜にして又己を持する極めて謹嚴なる、其作品之を證

の淺きに關はらず、各一別才として稱せらる△、蓋し其の性の趨る、山內多門、井澤蘇水、長野草風近くは池田蕉園の如き皆年次體を爲せる、當時稀に見る所にて候。宜なる哉、其の門を出でた△其の家塾に於ける制規の如きは整然として、純乎たる一私黌の